

---

# 月華闘士～此れと決めた者～

天桜 紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月華闘士と此れと決めた者

### 【Nコード】

N24190

### 【作者名】

天桜 紫

### 【あらすじ】

此処京都には、とある一つの言い伝えがある。

それは、かぐや姫がいた時代、かぐや姫を月に返す代償として、護衛として働いていた『月の人』が、数名地上に残ったというもの。そしてその『月の人』は、直接殺される事がなければ、永久に生き続けるという。

此の物語は、そんな月の人達と、此の時代の侍達、町娘を描いた、切なく残酷で、時として幸せな、複雑な愛と葛藤を描いた物語です。もしあなたなら、此の時代をどう生きる？

## 第壹章

俺は、女であり、男である。

かつて、私は女として、男に本気になった事が、たった一度だけある。

私は、その男の前から唐突に消えた。

何故なら、『俺』としての使命が残っていると、知ったからだ。

無論、『彼』には、何も言わなかった。

何故なら『彼』が、『地上の人』だったからだ。

「おい、とつとと食って行くぞ。」と、今日も明るく、橋の上で手を振る東を見て、「お前に飯を合わせていたら、飯を味わえないだろ。」と、団子の最後の一口を口に入れながら、鏡夜は言う。すると、東は、「んなどこで、お前の小さな声で言われても、流石の俺でも、何て言ってるのかわかんねえよ。」と独り、叫んでいた。私と鏡夜は、茶屋の表の椅子に腰掛けて、団子と茶を食べていたのだが、女将に別れを告げ、北東の方角にある橋の上で、一人手を振る東に向かい歩き出した。

「遅えよ」と、一人ふてくされている東を他所に鏡夜は、「例の、土佐の坂本という男の話だが……。」と、私に話し掛けてきた。「俺は、奴の言う事も一理あると思う。人斬りをなくそうという点は賛同すべきだと思うし、今の幕府のやり方が気に入らんという点でも意見が一致している。だから俺は、此の件は賛成だ。」私が意見を述べようとした時、ふてくされていた東が、「けど、俺は、内輪揉めしてる奴等も嫌いだな。それに、幕府の奴等には、散々、面倒見てもらってたのに、今更裏切れつかよ。なあ？紫癰。」そう私に同意を求めてきた。

確かに、私達は、地上に来たばかりの頃、身分を隠し、幕府で下女、下男として働いていた。「それは、身分を隠していたからこそそのも

のだ。」「と、鏡夜が冷静に言うのを見て私は、その事を自分に言い聞かせた。そして、「その事については、鏡夜に同意する。」「と、私は言った。「では、例の件については?」と、透かさず鏡夜は言った。

「私は、……賛同出来ない。」「私は、俯きがちに答えた。「それは、……忒年程前、お前に、共に所帯を持ちたいと言った、例の武士が原因か?」と、先程より明らかに低い声で鏡夜は言った。「それは、……わからない。」「そう答えた私に東は、「まあ、確かに面は良かったけどよ。地上の奴等じゃあ……なあ?」と、実に困まった顔をしていた。「確かに、俺達は、月の光を壺ヶ月浴びなければ、直接殺されさえないなければ、地上でも生きていける。そして、時が経つに連れて、自身が地上人ではないという意識を失いがちになる。それに俺達は、定期的に住む所を変えているからな。余計失いやすい。」「そう鏡夜は、口にした。「もうすぐ地上に来て捌百年か……長いな……。」「東は、まるで独り言のように呟いた。「けど、彼奴が捌百年間で、壺番良い男だった。」「そう呟いた私に、「その成りで泣くな。」「と、鏡夜は言った。そう私は生物学上は女であるが、武士の成りをして、男として、基本的には生活している。……けれど、彼は初めて初見で、男装の私を見て、女だと気付いたのだった。忒人と歩きながら、私は、彼と初めて出逢った時の事を、思い出していた。

ある秋の夜遅く、確か猪の刻位に、私はなかなか寝付けないが為に、京の町をぶらぶらと、一人男装で歩いていた。

すると、脇道から、酔った侍が浪士がぞろぞろと出て来たのだ。

私は刀に手を当て、何時でも抜ける様にして、角で建物に隠れていた。

そして、案の定、奴等は私に話し掛けてきた。「ん?なんだ小僧生意気な目をしておってからに。へつ。」「そうだぞ。俺達あ、御侍様なんだぞ。偉いんだ。はっ!」と。

その隙を見て、私は、「はっ。」と、小さな声で気合いを入れた。そして私は、ざっと見て参拾はいるであろう不逞浪士等を、いつも通り、僅か拾秒程度で斬った。

私達参人は、かぐや姫の護衛として、約百年程御仕えしていたが、ある時、姫様が地上から帰ってくる代償として、私達参人は、かぐや姫最強護衛部隊参人集として、地上に残る事となった。

自慢ではないが、私達参人は強い。そして、他の式人曰く、参人中では圧倒的な強さを誇っている……らしいのだ。だから、私にとって、あんな数の不逞浪士程度、何て事無かったのだが……、

「いやあ、凄いな、君。」と言う男と、ただ黙ったまま、軽く私を睨み付ける男が、歩きながら近付いて来た。

「凄いと思わない？左之さん。彼、僕が眼を擦ってる間に、彼等全員倒しちゃったんだよ。早い早い。」と、一人は興奮した様子で、微笑みながら言った。するともう一人は、「否、そりゃあ、まあ、確かに凄いが……。こいつ女だろ？」と、彼はもう一人に尋ねた。私は、此の事に舌番驚いた。私を一瞬で、女だと見抜いた人間等、此の約捌百年間一人もいなかったのだから。

## 第貳章

私は彼を、強く睨み付けた。

すると、彼は、「無理すんなよ。」と言って、私の頭を撫でた。

「――」其の瞬間、私の目から白い液体が、頬を伝い、地面に落ちた。

そんな私を見て彼は、「おいおい、何をそんなに驚いてんだ？自分で斬ったんだろうが。」私の顔を除き込みながら、彼は不思議そうに言った。

其の言葉を聞き、馬鹿にされた様な気分がした私は、「其の事に驚いているのでない。瞳から白い液体が、流れ出ている事に驚いているんだ。」

そう、彼を睨み付けながら言った。

「はあ？……ふつ、そりゃあ、涙って言うんだよ。お嬢さん。」と言つて、私の頭から手を話し、一人不逞浪士の遺体を、見舞わっている男の元へと歩み寄った。

「で、遺体の状態は？」と、彼はもう一人の男に聞いた。

「いやあ、見事なもんだよ。どれも此れも、急所をバツサリ。」と、もう一人の男はさっぱりした表情で言った。

「ねえ、『彼』新撰組に入隊させようよ。どうせ隊士は多いに越した事ないんだし。其れに、此れだけ早く、的確に殺れる隊士なかなかないよ。」と、上機嫌で言うもう一人の男を見ながら、彼は、俯きがちに、「おい総司、そりゃ、男だったら俺も賛同してえところだが、こいつは女だ。土方さんにでも、ばれてみる。」と言った。「でも、僕、どう見ても『彼』は『彼』にしか見えないんですよねえ。」と、おどけた様に言った後、総司という隊士は、「君、もしかして、もう何処かに入っていたりする？例えば、会津とかさ。」と、興味津々な様子で聞いてくる総司に対して私は、「私には、其の様

な者達と馴れ合う趣味等ない。」と言って、後ろを向き、其の場を立ち去ろうとした。

が、其の時、強い力で左腕を捕まれ、「で、君、名前は？」としなかつたつて！」と、其の様子を見ていた彼が、驚き慌て出した。

「ふふつ、左之さん。僕は本気ですよ。だって、なかなか居ないじゃないですか。あの人数を、あれだけの速さで斬っておきながら、涙を流して、しかも、其の涙を知らないで涙に驚く子なんて。それに、彼女、さつきから僕等の事ちつとも恐がらないし。…其れにさつきの、……涙に驚く前の泣き顔、凄く可愛かったですしね。」そう言いながら、総司は私にウィンクをした。

けれども、普段、男同然の生活をしている私は、何も感じないどころか、こ奴の頭は大丈夫なのだろうか、危うく心配仕掛けた。

「で、教えてくれるんだよね？」と、総司は、再び満面の笑みで私に聞いてきた。

「離れたら教える。」と言って、私は総司を睨み付けた。

すると総司の後ろから、右頬を掻きながら、少し照れた様子で、「…教えてやってくれねえか。」と、彼は言った。

「やっぱり気になるんじゃない。左之さんも。」と、総司はニヤツと笑いながら、言った。

「…うつ、うるせえよ。」そう言った彼を見て、思わず、私の口元が緩んだ。

その瞬間、式人の動きが静止していた。

「ふつ、…俺の名前は、紫癒だ。…月詠 紫癒。此れで良いか？」

そう言う私を前に式人は、何も言わなかった為、私は、後ろを向き、其の場からさつさと立ち去った。

## 第参章

俺と総司は、『月詠 紫癒』と、名乗った女が去った後も、忒人して、暫く其の場に固まっていた。

正直、初め俺は、俺に対してガンを飛ばしてきたあの女に、苛ついた。

女にガンを飛ばされたのを初めてだった。男なら慣れているものを。

とすら、思っていた。

だけど、嗚呼も表情がごろごろと変わるもんなのか。

人を斬った後の、あの冷静な顔、あの愛らしい泣き顔、あの涙に驚いた時の、両目を満丸くした少し可笑しな顔、

そして、極めつけは……

…あの小柄な容姿を、思い切り抱き締めなくなる様な、愛らしい笑顔。

一体、何だつてんだ。動機が止まらねえ。其れに身体中が、火照る様に熱い。俺があのガン飛ばし女に惚れただと。有り得ねえ。いくら何でも、あんな、男みてな女なんかに。

俺は、そう思いつつも、あの笑顔が眼に焼き付いて、どうしても、忘れられなかった。

僕が、我に帰って、左之さんを見た時、左之さんは、今迄見た事も無いくらい頬が赤かった。

其の時、僕は、直感的に感じた。

左之さんは、お紫癒ちゃんに惚れている。間違いない。

という事は、僕は、左之さんと、戦わなければならないという事だ。

…まさか、あんなに可愛くて、愛らしい笑い方をするなんて、考え  
てもみなかったな。

…でも、僕だつて…。

絶対に負けないからね。…左之さん。

と、心の中で呟いた。

そして、見廻りの帰り道も、僕等は、お互いに、一言も、言葉を交  
わす事なく、屯所へと、帰って行った。

私は、原田左之助、沖田総司両名と出逢った、其の次の夜も、  
また宿を抜け出し、昨夜、酔っ払いの出た所に向かう途中にある、  
『神金川』と呼ばれる川の上に架かる『神金橋』で亍人、風を浴び  
ていた。

そして、私は、亍人の人影が、私に近づいて来るのを感じた。

「まったく、お前、本当に女か。」と、其の人影は溜め息混じりに聞  
いてきた。

「原田…」私は、ただ亍言、そう言った。

「なんだよ。そりゃあ、いくら何でもねえだろ。苗字に呼び捨てつ  
て。」と、彼は、怒った様子で言った。

そして私は、「じゃあ、何と呼べば良い。原田左之助か？」そう聞  
いた。

「だから、あるだろもっと、色々とき。」と、彼は呆れた様子で答  
えた。

私は、頭の中を色々とき張り巡らせたが…、

「…すまない。其の忒つ以外、思い浮かばん。」「あのなら。」そ  
う、心の底から呆れた様に、私の隣に、橋に腕を掛け、彼は言った。  
そして其の後、暫くの間沈黙が続いた。

そして、「なあ、夜中に亍人で出歩くの、家の人とかは、何も言

わねえのか。」そう何処か寂しげに、彼は聞いてきた。

「否、私が身内では壱番強いからな。其れに、私の壱族は、内輪揉めは絶対にしないからな。」そう私がはつきり物を言ったのを見て、彼は、

「今日は会話してくれるみてえだな。」と、言っではにかんだ。

「壱族の慣わしに、乗っ取っただけだ。」と、私が言つと、「そうか。」と、短く呟いて、私の格好を見てから、

「寒くねえのか?」と、心配した面持ちで、彼は私に聞いてきた。私自身、鏡夜と東以外に心配など、ろくにされた事が無かった為、どうして良いのかわからない半面、昨日も確か心配されたよな?という気持ちもあり、ただただ私は、何も言わず、壱人考えていた。すると突然、背中から、温かい人の体温が伝わってきた。慌てて後ろを振り返って見ると、彼が私を、背後から軽く抱き締めていた。

「……………」。「どうしたらいいのか解らず私が、何も言えずにいると、頭の上から、

「温けえだろ。」と、優しい声で彼は言った。

私は初めての経験だった為に、全く、何も解らないまま、ただ黙って頷いた。

俺は、今夜は非番だったけれど、昨日会った、あの女の事が気になつて、仕方になった。そして、其のせいでなかなか寝付けず、俺は、昨日あの女と会った場所へと向かった。けれど、其の道中、俺は、昨日と同じ人影を見かけた。あの女は、壱人橋に腕を掛け、夜風に当たっていた。其の様子を見て、思わず俺は、また数秒見とれた。

そして、

「まったく、お前、本当に女か。」と、お紫癒に聞いていた。するとお紫癒は振り返って、

「原田…」と言った。

「なんだよ、そりゃあ、いくら何でもねえだろ。苗字に呼び捨てて。」「俺は、他の隊士達に呼び捨てにされるのは、年がら年中だったが、女に呼び捨てにされたのは、初めてだった。するとお紫癒は、

「じゃあ、何と呼べば良い。原田左之助か？」そう真顔で聞いてきた。

俺は、其の答えに苛ついた。

何故だかは知らねえが、俺は、こいつにだけは、呼び捨てにされるのは、『ぜってえ嫌だ。』と、感じた。

「だから、あるだろもつと、色々ときさ。」と、彼が言うと、

お紫癒は、色々と考えている様子だったが、

其れもまずおかしいだろうと、言いたい気持ちを俺は抑えた。

だって、昨日あいつ等をあの速さで斬っていた奴が、こんな事で考えを巡らせているなんてよ。

俺の中で、おかしさが苛々を抜いた。

「…すまない。其の式つ以外、思い浮かばん。」そう、本当に申し訳なさそうに言うお紫癒を見て俺は、「あのなあ。」そう、心の底から呆れた。そして、俺はお紫癒の隣で、橋に腕を掛けた。

そして其の後、暫くの間沈黙が続いた。

そして、「なあ、夜中に壱人で出歩くの、家の人とかは、何も言わねえのか。」と、俺が聞いてみると、

「否、私が身内では壱番強いからな。其れに、私の壱族は、内輪揉めは絶対にしないからな。」

という、不思議な回答が返ってきた。お紫癒が壱番強いのは未だしも、内輪揉めは絶対にしないってのは何の事だ？俺達新撰組が内輪揉めしているとも言いたいのだろうか。そんな事を考えていると俺は、昨日と違い今日は、お紫癒がしっかりと会話をしてくれている事に気が付いた。

「今日は会話してくれるみてえだな。」と、はにかみがちに俺が聞くと、「壱族の慣わしに、乗っ取っただけだ。」と、お紫癒は何で

もない事の様に答えた。

「そうか。」と、俺は短く呟いただけだったが、先ほどの、『身内』そして、『壹族』という言葉が俺は気になっていた。

やはり、何処かの密偵か何かなのだろうか。そんな事を考えていると、ふと、俺は、お紫癒が薄着な事に気が付いた。

「寒くねえのか？」と、聞いてやると、何やら不思議そうな顔で此方を見てきた。俺は、羽織物を持っていなかった事に気付き、仕方なく、後ろから抱き締めてやったつもりだったが、抱き締めた事に気付くと、慌てて後ろを振り返り、俺の顔を見て俯き、黙り込んだ。少しして、沈黙に耐えきれなかった俺が、

「温けえだろ。」と、言うと、頬を淡い桃色に染めたまま、何も言わず、ただ黙ったまま、お紫癒は頷いた。

そんなお紫癒を見て、俺は、抱き締めている力を、ほんの少しだけ強めた。

## 第肆章

彼、原田左之助に神金橋で抱き締められてからというもの、私は何だか落ち着かない気持ちでいた。

彼が、私が寒そうだと思い、羽織物を持っていなかったが為に、あの様な結果に至ったのは、私自身よく解っている。

そして、あの様な状態で約拾分程過ごしていたという事も後で、宿の時計と、己の感覚で知った。けれど、其れは、私が彼を忘れられない理由として、成立等しない。何故気になる？…何故だ。

俺は、槍を研ぎながら、お紫癒の事を考えていた。

何故、女のくせに武士として生きているのか。壱族とは何の壱族なのか。……考えても、勿論、答えは出ない。

そんな時、新八が俺の部屋へとやって来た。

「よっ！今日も又、寒いな。」と、言いながら、畳で壱人槍を研ぐ、俺の隣に座した。

「嗚呼。」

「なんだか最近、元気がねえんじゃないのか。左之。」と、右手で頭を掻きながら新八は言った。

「そんな事はねえが…。」と、言いながらも、俺は内心、新八には言うべきかと悩んだ。

「他の奴等に聞いたらよお。総司が恋煩いじゃねえか、なんて言うもんだからよ。」そう言った新八に、俺は返す言葉がなかった。

そんな俺を見かねてか新八は、「もし、……言いたくねえってんなら、俺も無理にとは、言わねえけどよ。」と、苦しそうに言った。

「否、いいんだ。」

そう言ってから、新八にお紫癒との事を話した。

すると新八は、

「……なあ、左之。……お前、其のお紫癒って女に惚れてんだよな？

其の、最初に会った時の、泣き顔とか、笑った顔とかによ。」と、俺に確認する様に聞いてきた。

「……嗚呼、多分……。」

俺は、此の日、自分で口にして、初めて、俺がお紫癒に惚れている事を完全に自覚した。

と言っても、初めて会った時から、薄々気付いてはいたのだが。

新八が、部屋を出て行った直後、「やっぱり新八さんには、素直なんですな。」と、言いながら、総司が俺の部屋へと入って来た。「残念な結果ではありませんでしたが、僕も負けないんで、じゃ。」と、舌言、言って、右手を顔の横に上げて、部屋を出るかと思いきや、後ろを向いた瞬間、「彼女の舌族は月の舌族だよ。」と、言われ俺は、総司の腕を掴んだ。「何だって、そんな事、お前が知ってたんだ。」そう言う俺を見て、「彼女の事が好きだから。自分で調べたんだよ。僕が調べたところ、彼女の年齢は約捌百歳。今迄、付き合った男は略零に等しい。其れと、式人の仲間がいて、此の式人は、式人とも男。」そう、笑顔で言い切った総司を見て、「……捌百歳だと……そんな事……。」

「残念だけど、彼女とお仲間の式人が約捌百年前に、かぐや姫を月に返す為に地上に残ったっていう、伝説の月華闘士だって事は、間違いないよ。其れに、月の人は、直接的な衝撃が身体に及ばない限り、永遠に生き続けるって言うじゃないですか。何より、彼女の強

さからいつて、考えられるのは此の位だよ。」総司は、呆然とする俺を見たまま、続けた。

「此の事を知っても、まだ、彼女の事好きでいられる？あんなに可愛く笑うのに、付き合った男が零なのはさ。多分、此のせいだよ。……もう放してくれてもいいんじゃない？」そう言う総司に俺は、「あいつの今いる場所は何処だ。」と、聞いた。「ふっ、神金橋を越えた所にある朱色の屋根の『光和堂』って宿屋だよ。」と、総司は笑いながら言った。

俺は其の後、光和堂に向かって走った。

## 第伍章

私が、宿の部屋で壱人、緑茶を飲んでいると、やたらと宿屋の中が騒がしくなった。

すると、私の部屋に東がやって来て、

「今日から来た団体客だよ。はあ、寝みいな。」そう言って私の部屋に寝転がった。

「其れなら、自分の部屋に行けば良いだろう。布団も、ちゃんと忒組あるはずだが。」そう言う私を他所に、本格的に寝息を起て始めた。刀を横で拭いているというのに、よく寝られるものだと思いながらも、私は、東を起こさずいたら、

「甘やかすところな事にならぬ。特に東の様な者は。」と、言いながら、鏡夜も私の部屋へと入って来た。そして、

「つい先日、此の近くで約参拾人程の酔っ払った浪士が、全員斬られた。」と、私に言ってきた。「其れで？」と、刀を見ながら言った私に対し、「其の頃、新撰組が、夜の見廻りとやらをしていたらしい。」と、鏡夜は続けて言った。

「何が言いたい。」そう睨み付けた私に対して、鏡夜は、「新撰組に斬られぬ様、用心しろと言っている。」と、睨み返された。

「俺が負けるって、意味じゃないんだろう。…怪しまれるなという意味か。」と返すと、「当たり前だ。」と冷静に返された。

…そう、私達は、お互いに、自分が壱番大事な、参人集なのだ…。

東を残し、紫癒の部屋を出た俺は、壱人、小さな声で呟いた。

「…此れでいい。…恋心は我等を狂わせ、接吻は我等を人に変える。」

…そう、其れは我等月の者の秘密。

何があるうと、紫癒と東には教えてはならない。  
姫様が、此の俺に託された秘密。……是が非でも守らねば。

俺は、冷たい秋風が吹く中、壱人、光和堂へと辿り着いた。

団体客なのだろう、入口はとてもじゃないが、入れる雰囲気ではなかった為、俺は裏口から宿内に入った。

其の時、中庭に出て来る壱つの人影が見えた。

其の人影は、紛れもなくお紫癒だった。

「紅葉が綺麗だな。」

そう、壱人呟いたお紫癒に、俺は話し掛けようとした。

けれど、壱度躊躇い、先に、考えを纏める事にした。

先日の不逞浪士の件は、俺と総司が御用改めをした事になっているから、問題はない。新八も問題なく、黙っていてくれるだろう。

……しかし、お紫癒が月の者だと？

本当にそうなのだろうか……。

けれど、不思議と俺は、お紫癒が月の者というのは、本当だと、心の何処かで確信していた。

だから、お紫癒が自分から、言い出さない限り、知らない振りをしようと思った。

そう、あいつの言葉で、あいつが言わなければ、意味がない事だと、俺は思った……。

そして、俺が考えを纏め終え、話し掛けようとした時、奥から壱人、男が現れた。

背は俺より少し低く、年の頃は、俺とあまり変わらないであろう男が、

「寒くねえの？あんまり勝手すると、鏡夜にまた何か言われるだろ。」  
「そう言う男にお紫癒は、「東、俺は鏡夜の家来じゃないんだ。お前も鏡夜の家来じゃない。」と、冷静に返した。

「新撰組の事は…さ。鏡夜なりに色々考えて言っただと思うぜ。確かに鏡夜の言い方は、どうかと思うけど、実際、悪気はないと思うぜ。」と、男が言ったのを聞いて、俺は、嫌な汗をかいた。

「話した事も無い奴等の事を、悪い奴等だと決めつける。…あの考えが俺には解せないんだ。」

そう真剣な表情で話すお紫癒の顔を見て、俺の額を流れる嫌な汗は止まった。

「けど、此の前は、其の考えもやむを得ないだろうって、言っただけじゃねえか。」

「あの時は、…ああ言う様に、鏡夜に頼まれたんだ。冠樟とかいう娘がいたろ？あの娘を諦めさせる為とか何とか。で、其れに協力してくれって言われて。」

「ん？何だそれ？其れじゃまるで、あの冠樟って女がお前に惚れてたみてえじゃねえか。」

「…だよな。でもいくら成りは男でも、中身は女だ、俺は。」

「…まあ、冠樟って奴も、最近では現れなくなっただし。いいじゃねえか。な！」男はそう言って、宿の中へと去り、入って行った。

男が中に入ったのを確認してから、俺は、『冠樟』という奴との事を聞こうと、お紫癒に話し掛けた。

「よっ！お紫癒、元気にしてたか。」そう言いながら草影から入って来た俺を見て、

「嗚呼、…其の…、お紫癒っていうのは、初めてだ。」と照れた様に言った。

俺は、静止しそうになったのを抑えて、「さっきの話してた奴って、…お前の身内か？」と、聞いた。

「嗚呼、兄の様であり、弟の様なものだ。」そう冷静な表情に戻って言った。

「そうか。……偶然聞こえたんだが、冠檸つてのは……。否、言いたくねえ様ならいいんだ。無理にとは言わねえ。」

そう言う俺を前にお紫癒は、「『米沢屋』って酒屋の娘だ。もう壱人の兄の様な奴の事を、大分好いていたんだが、……式ヶ月程前に、そいつが振ったんだ。其の酒屋の娘をな。」俺の顔が、余程気にしている様に見えたのか、お紫癒は、

「何て顔するんだ。気にしないでくれ。身内の色恋沙汰だ、原田。」そう言つて、俺の右頬を撫でて、笑った。

少しして、お紫癒は、俺の頬から手を離し、

「またな。」と微笑みながら言い、宿の中へと、戻って行った。

俺は、其の姿が見えなくなる迄、お紫癒の笑顔に見とれていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2419o/>

---

月華闘士～此れと決めた者～

2010年10月20日12時00分発行